

明治・大正時代の木彫



- ◆ 会 期 2022年 3月 5日（土）～ 2022年 5月 29日（日）
- ◆ 開館時間 午前10時～午後5時（入館は4時30分まで）
- ◆ 休 館 日 月・火曜日（但し、祝日は開館）
- ◆ 入 館 料 一般800円／大学・高校・中学生500円／小学生300円
* 障害者手帳をお持ちの方と付き添い者 1名は50%割引
- ◆ 主 催 清水三年坂美術館
- ◆ 概 要

日本では古くから木製の仏像・置物・細工物などが盛んに作られてきました。明治は社会変動に伴い、それら木彫を取り巻く環境が変化した時代です。とくに西洋の「美術」および「彫刻」といった概念の流入は、木彫界にも大きな影響を及ぼしました。帝室技芸員として知られる高村光雲・石川光明らはこの激動の時代に台頭し、明治から大正にかけて指導的役割を果たしました。

明治・大正時代には、木彫の近代化を目指して様々な試みがなされた一方、前近代から存続してきた置物や細工物の世界においても森田藻己の木彫根付など、高い技術力を駆使した名品が作られました。また光雲・光明・藻己ら東京を拠点とした作家のみならず、大阪などの地方でも木彫の作家たちが活躍しました。

このたびの展示では、当館が誇る近代の細密工芸のコレクションから、多彩な顔ぶれによる木彫作品を紹介します。幅広い近代の木彫の世界をどうぞお楽しみください。

[広報用の写真使用について]

当展示会の広報記事をご掲載頂けます場合は、出品作品の写真（デジタル画像データ）を無償でお貸し出しいたします。ご希望の方はメールでinfo@sannenzaka-museum.co.jp（広報担当：杉）までご連絡ください。なお、ご使用に際しては下記の注意事項をご確認お願いいたします。

- ・写真にはキャプションをつけてください。
- ・写真の二次使用は禁止いたします。
- ・掲載物が発行される前に、校正の段階で当館に確認をとってください。
- ・掲載物を1部寄贈してください。

◆主な出品作品



《鍾馗》石川光明（1852～1913）
高 21.6cm／大正2年（1913）



《月宮殿》高村光雲（1852～1934）
高 11.3cm／大正7年（1918）



《龍自在置物》穂山竹林斎（1891～1937）
長 68.0cm

体の各部を自在に動かせる！
制作には2年以上かかったとか！



《根付 薪束》森田藻己（1879～1943）
3.0×5.5×3.7cm

《童と犬》山崎朝雲（1867～1954）
童 41.5×15.0×22.0cm
犬 15.5×20.5×18.0cm
大正8年（1919）

【参考】主な出品作家 略歴

森田藻己（1879-1943）

東京の彫金家の家に生まれる。15歳で根付師・宮崎如藻の内弟子となり、明治40年（1907）、独立。木彫・牙彫をよくし、写実的かつ細密な根付を多数制作した。木彫置物の作例も伝わる。競技会・展覧会で受賞多数。

穂山竹林斎（1891-1937）

京都に生まれ、独学で木彫を学ぶ。大阪・粉浜を拠点として彫像や置物などを制作。大正末期から昭和初期にかけては大阪府・大阪市による美術工芸展に出品するが、晩年は工芸団体との関係を一切絶ち、仏像制作に専念した。

高村光雲（1852-1934）

江戸に生まれる。仏師・高村東雲に師事し、生涯を通じて木彫を制作し続けたことで知られる。門下からは米原雲海・山崎朝雲らを輩出し、明治・大正期の彫刻界において一時代を築き上げた。明治23年（1890）、東京美術学校教授および帝室技芸員。

石川光明（1852-1913）

江戸浅草の宮彫師の家に生まれる。幼い頃から家業の手ほどきを受け、文久3年（1863）には根付師の菊川正光に入門して牙彫を学んだ。明治期の牙彫隆盛の時勢に乗り早くから名を成したが、木彫も積極的に制作した。明治23年（1890）、東京美術学校教授および帝室技芸員。

山崎朝雲（1867-1954）

福岡県に生まれる。明治17年（1884）、福岡の仏師・高田又四郎に師事。同28年（1895）、第4回内国勸業博覧会に木彫作品を出品し、妙技銅賞を受賞。翌年上京し、高村光雲門下となる。数々の競技会・展覧会・博覧会で受賞し、指導者としても木彫界を牽引した。